

ドイッチャーのソ連観

上 島 武

要 旨

ソ連における非スターリン化は、トロツキーが唱えた下からの政治革命ではなく「上からの改革」として行われるであろうとのドイッチャーの予言は的中した。彼はその不十分さや中途半端、そして一進一退の状況を見据えながらも、全体として50年代の諸改革を高く評価した。そしてソ連社会がいつそう社会主義に接近していくであろうとの観測を示した。しかし一方でスターリン時代以来の経済発展動力＝国有経済と計画経済に「手放しの」評価を下していたため、またソヴィエト官僚制の敵対的性格に厳密な認識を欠いたため、この観測は結果的に裏切られる。とはいえ、随所に示された柔軟かつ多面的ソ連観は当時から今に至るまで群を抜くものだった。

キーワード

非スターリン化、上からの改革、国有経済、計画経済、革命的伝統

【はじめに】

私は前稿「ドイッチャーのスターリン論」において、スターリンとその事績に対するドイッチャーの評価に微妙な偏りのあることを示した。いま改めて概括するならば、まず、党内抗争におけるスターリンの勝利が、いかなる革命にも必ず生ずる後退・反動の一結果として、いわば不可避的なものと解釈されていた。次に、スターリンのもとで行われた「第二革命」すなわち工業化と農業の集団化がソ連における社会主義への歩みを促進するとともに、強力に推進された計画化がソ連のみならず全世界的にも重要な意義を有することが強調された。この間に生じた犠牲と混乱、とりわけ大規模なテロルへの批判も確かにあるが、それよりもかかる事業の歴史的意義に注目すべきであると言うのである。最後に、スターリンのもとで野蛮な手段をもってであれ、初

歩的な「近代化」を果たしたソ連は今後その野蛮の歴史を脱却し、歪められ、忘れられたマルクス主義の再興と実践に乗り出すであろうとの期待が表明され、その萌しはすでに、広域社会主義世界の誕生という形で現れつつあるとも言われた。

以上の認識は、いまだスターリン存命中に為され、その直後にソ連で実際に起こったこと、すなわち非スターリン化とスターリン批判に接する以前に下されたものであったから、それだけ一層その先見性を際立たせたように見えた。その印象は、他ならぬドイッチャー本人のものでもあったことだろう。したがって彼がその後精力的に展開するソ連論は、良い意味でも悪い意味でも先の認識を踏襲するものとならざるを得なかった。どこが良くて、どこに問題を残したのか、それを述べるのが本稿の課題である。だがその前に、処女作『スターリン』の翌年（1950年）に出た『ソヴィエト労働組合史』に触れる必要がある。小著とはいえ、彼のソ連観を一貫する基本視点が集約されていると思えるからである。

(1) 隷従への道？

この著作はその題名にもかかわらず、本来の労働組合史ではない。その運動、役割、組織の変遷もそれとして説かれぬことはないが、それらを主たる目的としたものとは思えない。全編を貫く基調は、ソ連の労働者が革命後たどった国家への従属の歴史、そこでさまざまな形で加えられた支配、強制の歴史である。労働者の解放を目指した革命の後に何故かかる事態が生じたのか、それは果たして、社会主義すなわち「隷従への道」（ハイエク）との臆断を立証することになるのであるか、これに答えるのがドイッチャーが自らに課した課題である。回答は次の一文に凝縮している。

「ソヴィエトの労働組合史を叙述することは、実際のところ、計画経済批判を確証することにはならないのである。なぜならば、この分析が明らかにしているものは、ソヴィエトの労働組合が果たしてきた任務というものが、計画経済それ自体の必要によって規定されているのではなく、極端に低位の経済的・文化的発展、つまり最近にいたるまでロシアが位置した水準に計画化を適応させたことによるものであるからである」¹⁾。

1) ドイッチャー、労働組合運動史研究会訳『ソヴィエト労働組合史』序章社、1974年、170ページ。ただし訳文には若干の変更を加えた、以下同じ。

この結論は、ソヴィエト労働組合が早くも革命直後から本来の機能を失い始め、戦時共産主義の下で急速に、ネップの下で若干の復活を見るものの全体としては着実に、そしてスターリン時代の計画経済下で完全に失って、国家の従順な道具となり果ててしまったとのドイッチャー自身の分析結果に対して為されたものである。だが、経済的・文化的発展が低位である時、何故強制が必要であるのか？ 彼はこれに答えて次のように言う。「ロシア産業革命（スターリン下の工業化）の要素にまでなった過酷な強制のすべては、主として、粗野で無規律の農民を動員し、訓練し、教育するにあたって存在した驚異的な諸困難をいかなる犠牲を払ってでも克服しようとした支配者の決意によって説明される」²⁾。しかし、本当に説明できるのであろうか。そもそも、ドイッチャーがここで述べている訓練・教育の過程は資本の原始蓄積過程においてこそ必然的なものであって、社会主義を志向する過渡期において原則的に排除されるべきものであることは論をまたない。革命直後における内乱期にかかる要素が必要となることはある。トロツキーが提起し、実践もした強制＝労働の軍隊化が部分的に成功したのも、トロツキーの早のみこみ（人は怠惰であるが故に強制は避けられない、云々）とは異なり、それが臨時・非常の手段であり、同時にそれなしには革命と自分自身をも保持できないことを労働者が直感し、理解もしていたからである。

したがって、この二条件が失われた時、強制は労働者の忌避するところとなる。トレード・ユニオニズムの再興は必至である。内戦が基本的に終了した後で起こった労働組合論争で、トロツキーが提起した「ゆさぶり戦術」が誤っていたのも当然であろう。ただし、論争で彼が提起したもう一つの方針、すなわち労働組合の国家機関への漸次的統合は、権力機構としての国家の社会機関への漸次的統合の展望を包含するものとして、具体的には、労働組合がそこで労働者が真に生産と管理を学ぶ場、文字通り共産主義の学校になっていく道として、当時も今も評価できる側面を有していた。ネップ下のボリシェヴィキは何故これに気がつかなかったのか。他方で、トムスキーのトレード・ユニオニズムはもちろんのこと、レーニンの折衷的構想（労働組合は共産主義の学校であるとの）も全然実践されず、論争時点ではいかなるグループによっても提起されなかった方針、すなわち、労働組合の国家への従属（それはトロツキーの言う、また党綱領も明記していた労働組合の国家機関化とはまったく似て非なるも

2) 同上、172ページ。

のだった)のみが着実に進行した真の理由は何であったのか。

にもかかわらず、ドイッチャーがこの問題で次のような解釈を示していることが問題となる。「実際にはトロツキーの定式が後年、計画経済の時期に労働組合の地位を決定することになった。当時の労働組合は、どの点から見ても政府機構の一部門になっていた。しかし理論上では、レーニンの定式は変更されず依然として効力を発揮していた」³⁾。ドイッチャーは、レーニンの定式なるものを次のように規定している。「労働組合は国家に併呑されるべきではなく、自由意志で国家と協同すべき非政府的、非国家的組織」⁴⁾と。とは言え、実際には上述の通り、レーニンの定式とトロツキーの定式はいかなる意味でも、またいかなる時期にも、ソヴィエト労働組合の地位を決定したことも、影響を及ぼしたこともない。実際に支配したのは、労働組合は政府機関の一部を僭称してはならないが、政府・党の忠実な手足とならなければならないとの、典型的な代行主義的理念だった。だからドイッチャーはレーニンとトロツキーだけではなく、スターリンとその政策をも或る重要な面で誤解していたと言わなければならない。

スターリンの政策について見る時、ドイッチャーはスターリンがレーニンに反する政策を自らの政策として偽った旨を正しく指摘している。例えば次のように言う。「レーニンは、正常な情勢の下で労働力を強制的に配分すること、また労働組合をこの目的に使うことは不適當であるとしていた。この原則は党の伝統の中にまつりあげられ、スターリン体制はこれを称揚しなけりなかつた。理論的には労働は依然として“自由”であったが配分の原則はますます大規模に、しかも野蛮に導入された。しかしそれはかの教義と公然とは衝突しないようにされていた。教義と現実とのこの極端な乖離は、トロツキーによる労働の軍隊化を含めて戦時共産主義の労働政策にはまったく存在しなかつた偽善的傾向を、スターリン主義の労働政策に濃厚に付与するものであった」⁵⁾。

一方、スターリン政策の偽善性を糾弾することと、その教育的効果、すなわち強制による近代的労働者の形成を弁ずる、または承認することとは両立するであろうか。先に、労働者自身がその必要性を認める場合に限って一定の生産効果のある旨を述べ

3) 同上, 80~81ページ。

4) 同上, 80ページ。

5) 同上, 110ページ。

た。加えてそこに自己教育効果を認めることもできる。逆にそうでない場合、労働者が強制を忌避し、労働者が自らの置かれた状態を不正なものとみなす時は、いずれの効果も失われるであろうことは容易に想像される。例えばスタハーノフ運動について、かりにその端緒が労働者の自発性に基づいていたにせよ、急速にそれが「自発性の動員」（塩川伸明）なる欺瞞、すなわち事実上の強制に転化するに及んで、生産的效果はもちろんのこと、教育的側面においても逆効果が露呈する。ドイッチャー自身、こう書いているではないか。「スタハーノフ労働者が一般労働者に暗殺されたこともあった。さらにスタハーノフ労働者の作業を乱し、遅らせようとして、労働者たちが彼らの作業具を壊したり隠したりすることもよくあった」⁶⁾。

だがそうなると、強制の適用、労働組合の自主性の喪失を単に革命後ロシアの低い経済・文化水準によって弁明すること自体が問題となる。それらは客観的条件の所産であると同時に、それ以上に、この条件に対する主観的に誤った対応の所産である。そして誤った対応の源泉は誤った政策である。誤った政策は党の墮落・変質の証である。すなわち自らの政策に対する民衆の批判はもちろん党内の批判も一切許容せず、批判をすべて排除の対象とし、不首尾をあげて他に転化する（粛清）との哲学で武装しつつあったソヴィエト官僚制の産物である。

（2）非スターリン化とスターリン批判

スターリン時代のスターリン主義に見られる一大特徴は、上記、排除・粛清を大規模かつ凄惨なテロ手段によって実践したことにある。したがって、この時代の民衆の低い文化水準を語るのであれば、かかる野蛮な実践を排除できなかった民衆の政治的未成熟についてこそ語るべきであろう。それはともかくとして、いずれにせよかかる方法がやがて行き詰まること、すなわち、経済的には一層の生産性向上・生活改善を実現することが不可能となり、他方でもかかる統治方法の存続自体が危殆に瀕する可能性があることは容易に推測できる。統治集団の内部に危機感が生まれ、やがて被統治集団との間に重大な亀裂を生ずる可能性が高いからである。つとにトロツキーはこの体制が長続きしえぬ所以を洞察していた。ドイッチャーはそのことを知っていた。ち

6) 同上，147ページ。

なみに、これほど容易な推測をも為しえない人々が洋の東西に少なくなかった。一方で頑固なスターリン主義派、他方に同じく頑固な反ソ・反共派、そしてこれとは別にこれまた頑固な自称トロツキー派を加えることができるかもしれない。彼らはトロツキーその人の説いた方法、すなわち労働者による武装反乱以外に非スターリン化はあり得ないと確信していた。

ドイッチャーはそのいずれからも自由な立場に身を置いていた。この立場ゆえに彼はスターリン死後の非スターリン化を予言することができ、その実現をソ連にとっても自分にとっても歓迎することができたのであった。だが冒頭で示唆したとおり、このことが彼のその後のソ連論を妥当なものとする一方で、微妙な誤解をそこに添える結果ともなった。その「自由な立場」とは次の二つの認識の上に立っていた。まず「スターリン時代の終わりには人民は文化的にスターリニズムの統治手段や道徳的風潮よりすぐれていた……スターリン時代の最後の数年と数ヶ月には、激しい不快な気分が表面化したか、その根底には、人民がスターリニストの後見を必要としないほど成長をとげたという事実があった」⁷⁾。もう一つは、以上の楽観的観測にもかかわらず、スターリン後の改革は下から行うべくもなく、上からしか行われまいであろうというものである。「独立した政治綱領をつくり、それに基づいて行動することができるような集団は一つも存在しない」⁸⁾からである。それというのも、「ロシア社会は一切の政治的イニシアチヴを支配者たちにゆだねることに慣れてしまっており、独立的な行動をとることができなくなっていた。改革はただ上から、支配的グループの内部から始めることしかできなかった」⁹⁾。

既に私自身何度も書いてきたように、ドイッチャーによる後者の認識は完全に正しい。というよりも、それは誰も否定することのできない事実だからである。しかしながら前者の認識は単に楽観的に過ぎただけでなく、自ら与えた後者の認識とも、そしてその後の事実展開とも大きくかけ離れていたように思われる。ここでソヴィエト人が当時、そしてその後もついに自立した個人、政治的人間となり得なかった事情を理論的側面から簡単に振り返っておきたい。

ドイッチャー自身の表現を借りて言うならば、問題の核心は、近代化された工場に

7)8) ドイッチャー、山西英一訳『ロシア・マレンコフ以後』光文社、昭和28年、117ページ。

9) 同上、150ページ。

働く労働者と機械化された農場に働く農民たちが、本当に古いロシアの野蛮から解放されるに至ったかということである。ここでの問題は彼らの読み書き能力ではない。古い迷信からの解放でもない。近代工業が人間に与えてきた精神的能力、すなわち、集団の一員として互いに競争を強いられる中で自然に育まれる個人としての自立性と向上心、同時に集団的労働の中でこれまた自然に育まれる相互連帯の感情と行動、こうしたものは幾分なりとかれらの資質の一部となり得たであろうか。その可能性を阻んだのは強制、威嚇、懲罰だけではない。実に報償すらが、そのズタズタに歪められた不合理な内容、形式によってこれを阻んだのである。生産過程における緊張と創意は総生産高目標の達成に貢献する限りで報償の対象となったが、実はそれさえ、次期総生産高目標値の吊り上げに連動するとの理由で、仲間からも、そして往々「上から」さえ忌避された。いわんや総生産高達成に矛盾しかねぬ創意、新機軸をや。

資本主義工業は生産過程における労働者を自立化することによって、労働者に自己解放への可能性を与えた。確かに資本主義的労働過程は終始資本の支配下にあるのだから、そして労働者は自らと資本との関係を個別的契約関係としか意識できないように物質的・精神（イデオロギー）的に拘束されてはいる。しかしこの拘束は奴隸的拘束ではない。労働の終わるところ、自由の時間が保障され、そこで彼らは労働過程の性格を反省する余裕を得る。労働過程自身が持っている自己解放への可能性にも反省が及ぶ。次なる進歩は労働組合である。もう一つは政治的覚醒である。

しかるにかかる可能性のどれ一つとして満足に存在せず、存在していると百方説論・宣伝されたところで、そのようなものがどうしても見えてこないのが「ソヴィエト的生産様式」なのである。“諸君は生産手段の所有者である、しかし、全知全能、神聖にして不可侵なる党と国家を通じての”，この但し書きとその文字通りの実践は、たとえテロの介在がないとしても、生産手段利用の改善、生産性上昇のための個別的イニシアチヴを奪いとる。前述の通り、往々にしてイニシアチヴは穏やかにであれ罰せられる。だから、個人的自立の出発点ともなるべき個人間の励みあい(соревнование, Wettbewerb)は存在しようにもし得ない。何よりも自覚的な協力、いわんや政治的な覚醒、その行動など論外である。

一方、スターリン死亡の翌日から始まった実際の非スターリン化をドイッチャーはいかなるものとして把握していたのか、それは何から何への移行として理解されていたのか。彼は往年のトロツキーによる診断を回顧して次のように言うのである。「1930

年代にトロツキーは、スターリニズムに対する“制限された政治革命”を唱導した。彼はそれを完全な社会革命とは見ないで、国民を恐怖に陥れている政治警察の首魁と少数の徒党に対する“行政的行動”であると見ていた。いつもながらトロツキーは悲劇的に時代に先んじており、将来に対する洞察力はまさしく予言者的であった。もっとも、スターリンの一番密接な協力者たちが彼の構想にしたがって行動しようとは想像することができなかったが¹⁰⁾。そしてこう続けて断言する。「今日マレンコフ政府は、トロツキーが考えていた“制限された革命”をそっくりそのまま実行しているのである」¹¹⁾。

“制限された政治革命”(a limited political revolution)は、文脈からいってトロツキーの“第二の補足的な政治革命”を指していることに間違いはない。だがドイツチャーがそう認めるのであれば、それは断じて“行政的行動”(an administrative operation)ではないし、スターリンと一部高級官僚の追放だけではあり得ない。それはあくまでソヴィエト官僚制全体を解体し、生産過程に対する労働者の支配・管理を実現するためにソヴィエト民主主義を全面的に再興することを指している。だからそれは政治権力の直接的担い手をソヴィエト官僚機構から労働者に返還するという、権力の移動に他ならぬという意味で革命である。ただし、生産手段の所有制度自体には手を触れるものでなく、ただそれをより堅固な基盤の上に置き直すだけであるという意味で社会革命ではなく、一個の政治革命に過ぎないというものであった。

ドイツチャーがこれを知らぬということとはあり得ない。ただ彼には、トロツキーの綱領は非現実的である(下からの革命に立ち上がるべき労働者は存在していない)、故にそれは誤りであるとの先入観がある。スターリン主義の廃棄はただ上から行わざるを得ないとの洞察がある。だから、独裁者の埋葬の翌日から始まった驚くべき死者冒涇と一連の政治・社会・経済改革は、トロツキーの綱領中、少なくとも現時点で現実的に可能な部分であり、それ以上は望み得ぬところであると思ひこんだのである。第二の補足的な政治革命を制限された政治革命とし、それを行政的行動に等しいとしたのは、かかる思いこみに起因するドイツチャーの“しくじり行為”なのであった。

しかしながら、しくじりはしくじりである。それはトロツキーの綱領の矮小化を伴っただけではない。もっと重大なことは、後継政権による非スターリン化の意義を見

10) 11) 同上, 194ページ。

誤り、さらにはそれがスターリン主義の本質に対する微妙な誤解から発していたということである。ここでは次の点だけを指摘しておく。私は先に「スターリンは野蛮な手段で野蛮とたたかった」との彼の規定を問題とした¹²⁾。だが、本当にスターリンは野蛮とたたかったのか、それも真剣かつ効果的に、との疑問も生まれるが、さらにこうも付け加えなければならない。スターリンは野蛮な手段で野蛮とたたかったが故に新たな野蛮を創り出しもした、と。その野蛮こそテロ・暴力による排除・粛清であり、その無制限の拡大であった。その悪影響は社会のあらゆる面に及んだ。それはついに統治集団の安定を脅かすまでに至った。スターリンのスターリン主義はもはや有害無益である、これが非スターリン化の本質だった。

とは言え、この本質をドイッチャーが誤りなく捉えていたのではないと思わせる文章を、彼は残している。「新しい指導部は単一の指導者による支配を非難しているが、単一政党に根ざした単一の党派による支配が間違っているとは考えていない。彼らはスターリンなしの、反スターリンのスターリン主義者に留まりたいと考え、1920年代の“正気”で“汚れない”スターリン主義の精神、古きボリシェヴィキの血や多数の農民と労働者の血にまだ手を浸していないスターリン主義の精神を取り戻したいと思っているのである。彼らは後日の“狂気”のスターリン主義が、かつての“正気”のスターリン主義から出てきたことを自覚していない。また、その責めを負うべきものが気まぐれで残酷なスターリンの性格だけではないということを自覚していないのである」¹³⁾。ここでは単一政党・単一党派の独裁によってソヴィエト官僚制の護持を図るという非スターリン化の論理が誤りなく指摘されている。したがって同時に非スターリン化とスターリン批判の「あいまいさ、まわりくどさ、ごまかし」¹⁴⁾も見逃すことがない。「彼らはスターリン主義的方法でロシアからスターリン主義を追い出していると言えるかもしれない」¹⁵⁾。

12) 拙稿「ドイッチャーのスターリン論」『大阪経大論集』53巻2号参照。

13) ドイッチャー、山西英一訳『現代の共産主義』番町書房、昭和49年、20ページ。

14) 15) ドイッチャー、町野武・渡辺敏訳『変貌するソヴェト』みすず書房、昭和33年、11ページ。

(3) スターリン主義の遺産

にもかかわらず、彼は一旦開始された非スターリン化が幾つかの中断やジグザグはあっても、以後一貫して継続するであろうことをいささかも疑わなかった。「事実を発見し、責任を帰することを狙う、スターリン時代についての批判的吟味」に中止をかけることはできないだろう、そしてそれはスターリン自身から、彼の弟子たちや、共犯者や、後継者たちに……連鎖反応的に」進むことだろう。また東欧における粛清劇が洗い直されるとともに、「トロツキー、ジノビエフ、カーメネフ、ブハーリン、ルイコフ、トムスキー、ラコフスキー、ラデック、その他の多くの者を復権させなければならないだろう」¹⁶⁾。これは彼が第20回党大会を論評した1956年の予言、次は1960年に表明された楽観的観測。非スターリン化とその後の経済・社会的発展は「スターリニズムの盤石の地殻をつき破ってしまった。それはまたフルシチョフ主義のそれよりはるかに薄く、はるかにもろい殻をつき破るだろう」¹⁷⁾。

あとから振り返ってみる時、少なくともスターリンによる犠牲者の名誉回復に関する限り、ドイッチャーの予言は的中した。なにがしかの時間的ズレはあったにせよ、上記リスト中、トロツキーだけは公式の復権から洩れたものの、他はすべてペレストロイカの過程で正式に復権した。トロツキーも事実上、名誉を回復したと言ってよい。一方ここに生じた時間的ズレ、すなわちフルシチョフ改革に対するブレジネフ反動からペレストロイカ始動にいたる時間の経過が、一連の復権の政治的意義を根本的に変質せしめるほどの役割を果たしたことを認めないわけにはいかない。それはロシア革命をスターリン主義の罪惡から浄化するのではなく、ロシアを十月の「罪惡」から浄化するのに貢献させられたのである。だから、時にジグザグはあっても基本方向に変わりはないとの信念、その的中を、その故をもって肯定的にのみ評価するわけにはいかない。そこにおいては時間の要素が決定的であり、そのテンポを決定的に左右するのが非スターリン化をめぐる政治的対抗（官僚制と労働者階級との）の変化であることが、ドイッチャーにおいてどこまで意識されていたのか。次にこの問題を再び一般的・理論的レベルで考察する。

16) ドイッチャー、山西英一訳『ロシア・中国・西側』TBSブリタニカ、1978年、86～87ページ。

17) ドイッチャー、山西英一訳『大いなる競争』岩波新書、1961年、32ページ。

【生産手段の社会的所有】

周知の通りドイッチャーの終生変わらぬ信念の一つは、トロツキーと同様、国有財産と計画経済が生産力の急速かつ持続的な成長を単に可能とするばかりか、必然的なものとする、というものだった。そしてテルミドールと大量テロにもかかわらず、社会主義への前進の基礎となるべき国有財産、計画経済が依然保持されているとした30年代後半のトロツキーの判断を、20年後のドイッチャーは共有している。例えば、「スターリンの独裁によって抑圧されたソヴェト国民は、政治的にもモラル的にも、かつてと同様、社会主義へは遙かに遠い状態にあった。事実、生産手段の公有はしっかりと強化されはしたが、社会主義のロシア的半分、初期レーニン主義時代の大ざっぱな庶民的民主主義は大部分破壊されるか、墮落させられた」¹⁸⁾。

生産手段の公的所有はしっかりと強化された？ 一見トロツキーと共通する認識だが、厳密にはそうは言えない。トロツキーにあってはテルミドール後の官僚的変質の進行で、生産手段の所有にも重大な変質が、すなわち、官僚が生産手段の集団的管理者から私的所有者に転身する可能性が意識されている。ドイッチャーはこの可能性に疑義を呈するのである。しかしながら、公有が強化されたというのは、「社会主義セクター」が崩壊も縮小もせず、全体として維持され拡大したという意味でなら正しいが、本来の社会的所有としての内実を深めたという意味では絶対でない。そもそも「政治的・モラル的に墮落」し、大衆民主主義が窒息せしめられている時、本来の公的所有の強化について語ることが可能であろうか。後年、ゴルバチョフは、労働者の生産手段からの「疎外」状態について語り出す。曰く、「社会主義的所有は、しばしば官庁と地方の縄張り主義に食い荒らされ、“誰のものでもない” 無料のもの、現実の主人を奪われたものとなり、多くの場合、不労所得を捻出するために利用された」¹⁹⁾。

疎外の現実には疎外されているとの意識、感情が対応する。全人民的所有とは誰の所有でもないという意識と、そうであるならばこれを盗み取ることも反人民的ではないとの意識および実行の温床が出来上がる。こうした意識を克服するためには過酷な懲罰だけでは足りない。まさに庶民的民主主義の再興が不可欠となる。これがあって

18) 前掲『現代の共産主義』68ページ。

19) 中沢孝之編訳『ゴルバチョフはこう語った』潮出版社、昭和63年、82ページ。

初めて労働者相互間の連帯意識も、生産過程における自主的競争意識も発生する。また、このことなくしては社会主義的協業の制度化も形式的なものに留まる。先に時間の要素が決定的であると述べたのも、この点に関わる。非スターリン化がこの次元に及ぶことなく、どんなにその意義と緊急性が大きかろうと、労働者の「福利・厚生」面に限定されるならば、そしてまた、官僚制の政治的・経済的特権の剥奪に、せめてその重大な制限に及ばないのであれば、労働者はかかる意識を持つに至らず、意識の制度化もまったく不可能となる。ゴルバチョフが全人民的所有のいがい現実を語りだしたとき、彼を含めて官僚の少なからぬ部分が、その社会主義的再生ならぬ、私的所有への転化を想い始めていた。労働者もそれを受容する気になりかけていた。

【計画経済と経済成長】

周知の通り、トロツキーは経済計画の必要性を最も早くから唱えた人である。彼が反対派に転じて当時の主流派を批判した一根拠は、計画化作業の遅れによって革命政権の基礎たる国有工業の復興・発展が個人農業の発展に立ち後れる危険性があるというものであった。また、スターリンの手による冒険的工業化に重大な欠陥、危険のあることに警鐘を鳴らしながら、それがもたらした高度成長は、計画化の成果以外の何物でもないことを率直に認めた。しかもその上、スターリン体制の強化、大量テロが経済発展に多大の障害をもたらしつつあることを認めながら、なお計画経済の優位を説くことをやめなかった。

ここから往々にして、トロツキーは計画経済を（国有制度と共に）神秘化したとの批判または誤解を生むこととなった。しかし、それも上記の通り、官僚制による墮落・退化の危険性を洞察した上でのことであって、彼の第二革命綱領と不可分であったことを忘れてはならない。これに対し、ドイッチャーはどうであったか。彼は1960年の『大いなる競争』で次のように書くのである。

「国民の工業力を支配している国家のほうが、私的企業よりもこれらの任務（巨大な規模の新しい発明や科学上の大事業、そして、ものすごく費用のかかる無数の計画）を遙かに良く遂行することができる。これこそまさしく西側がまだ遙かに富んでいるにもかかわらず、ロシア人が部分的に西側に追いつくことのできた決定的な理由なのである」²⁰⁾。これはほとんどトロツキーが示した認識そのものと言ってよい。同時にドイッチャーがこう書いた時はまさにフルシチョフの唱導した“アメリカに追いつき

追い越す経済競争”が初期の、あくまで初期のめざましい成果をあげつつあった時であった。だからドイッチャーが続けてこう述べる時、彼はフルシチョフに完全に追随するのみならず、フルシチョフの持っていた幻想を完全に共有していたと言わなければならない。

「今日ソ連は世界第二の工業国であり、アメリカと経済的に肩を並べ、やがて10年ほどすれば世界で一番富裕な工業国になろうと熱望している。ソヴィエトの工業拡張の率はアメリカのそれより遙かに高いことが今日一般に認められているので、比較的近い将来に、ソ連が本当にアメリカと肩を並べる工業国になることは、きわめてありそうなことである。今後10年してもソヴィエトの生活水準はいぜんとしてアメリカより低いかもしれないが、西ヨーロッパ諸国の水準より高くなっていることは確実である」²⁰⁾。そして更に、「1984年までには、一日の労働時間が4時間、それどころか3時間を超えないようになっているだろう……一体、これはとっぴな夢だろうか？ 私は、そうは思わない」²¹⁾。

私が、今になってこの無残な予言を引く理由はフルシチョフやドイッチャー、とりわけドイッチャーにかかる予言をあえて為さしめた思想的・理論の根源を明らかにしたいと思うからである。単にイデオロギース・心情的共感だけが将来展望を誤らせた、と言ってすますには余りに問題が深刻だからである。

第1に確認すべきは、既に言い古されてきたところではあるが、ソ連が実際に経験した高度経済成長の原因を単に公有制に基づく計画化一般に帰すことはできないということである。まず、ネップ期の成長を支えたのは個人農業の急速な復興であった。次には国有工業に比較的多くの遊休設備が存在し、新規設備投資も財政的制約だけでなく政策上の逡巡の影響を受けて停滞気味ではあったものの、なお着実に増大した。ここで国有部門の存在、貿易の国家独占の果たした積極的役割を無視することは当然できないが、逆にそれだけによってネップ下の経済成長を説明することもできない。上記の諸要因がなかったとしたら20年代の高度成長は得られなかったであろう。そしてそれは時の当事者たちがよく心得るところでもあった。曰く、本格的建設期には期待できぬ「復興期」固有の可能性と。

20) 前掲『大いなる競争』117ページ。

21) 同上、107ページ。

次なる「大躍進」を支えたのは農民収奪と相対的低賃金、大量の新規労働力の創出と訓練、そして先進資本主義国からの技術移転である。これは一部、社会主義的原始蓄積法則の実践でありながら、一部はその侵害であった。当法則は、その忠実な実践はなおさら、基本的生産力である労働者・農民の物理的損耗を予想するものではなかったからである。またこの間に巨大な浪費と失費があったこと、品質の改善と労働生産性の向上にさしたる成果のなかったことを考えれば、この時期を偉大な建設期とだけ規定するのは正しくない。ここでも公有財産制が一定の役割を果たしたのは事実であり、大建設それ自体が資源・労働力の計画的動員の成果だったのである。とは言え、公有財産と計画化からの労働者（農民も）の疎外も着実に進行するのである。

最後に、戦後の復興から50年代と60年代、一部70年代に至る幾つかの期間に見られた高度成長にも、それぞれ独自の発展要因があった。スターリン批判がもたらした士気の高揚、偏狭な鎖国主義からの脱皮、さらに小出しではあったが一連の経済改革がもたらした初期効果など。しかしこの間を一貫して作用し続けた成長要因がある。それがいわゆる外延的発展の可能性であった。その条件が枯渇し始めた時、成長は停滞し、時に後退した。それは政変の背景ともなった。だから当事者たちもこのことを率直に認め、内包的発展への転換策を模索した。ブレジネフでさえ、口ではこれを促してやまなかった。ペレストロイカはその最後の試みだった。しかし、時すでに遅かったのである。

第2に問題とすべきは、国有財産・計画経済と経済成長の関係についての理論的規定である。ドイッチャーは最後の著作『ロシア革命五十年——未完の革命——』で、こう述べている。「封建的財産関係は、それどころかブルジョアの生産関係でさえ、経済的沈滞または緩慢な成長テンポと両立するかもしれないが、国有制は両立しない。ことにそれがプロレタリア革命によって低開発国に樹立された場合にはなおさらである。この制度は、急速な前進への強制と、豊富を目指して努力する必要、そして合理的な社会管理を要求する、あの社会的生産過程を発展させようとする衝動を、それ自体の内部にかかえているからである」²²⁾。

抽象的次元では問題のない規定のように見えるけれども、上述の通り、ソ連における経験はそれを裏書きしていない。国有制度、とりわけ官僚国家の下での計画経済は

22) ドイッチャー、山西英一訳『ロシア革命五十年』岩波新書、1967年、58～59ページ。

経済成長にとってブレーキとなることが幾重にも証明されたからである。「発展への衝動」がかりに存在したとしても、それを抑止するメカニズムが大量抑圧の衰退以後も機能し、このメカニズムを除去する能力が社会の上にも下にも存在しなかったことについて、ドイッチャーは遂に考える機会を持たなかった。それは彼が70年代の停滞の時代を見る機会を得なかった（彼は惜しくも『未完の革命』公刊の年、1968年に急逝している）ことによるだけではない。「合理的な社会管理」と言いながら、それを伴わない国有制がいかに非・反経済的機能を発揮するかについて真剣に考察する必要を認めなかったからである。それこそ彼がトロツキーと異なり、ソヴィエト官僚制の敵対的性格（労働者、社会にとっての）を直視しなかった結果なのである。

付随的に次のことを指摘してもよからう。停滞や緩慢な成長と理論的に両立し得ないのは、国有制よりむしろ資本家的私有制である。それは封建領主の私的欲望をみたく使用価値のための生産と根本的に異なって、初めから価値・剰余価値のための生産となる。したがって、生産拡張欲と致富衝動には限界がない。これに対して社会主義的生産様式は（むろん、それが成熟段階に到達すればの話だが）、「生産のための生産」も「蓄積のための蓄積」も知らない。それは基本的に使用価値のための生産であるという点で封建制と共通している。もとより、社会の全成員の必要を、それも調和的にみたくという意味での。旧「社会主義経済学」が強調した「それは価値のための生産でもある」との命題は、だから二重に誤っている。未だ達成されてもいない社会主義を念頭に置いた点で、また、過渡期においては全生産者の私的利益＝欲求を考慮し依拠もしなければならぬのに、これを軽視し、重視し始めても、これを保証する方法＝制度の構築に失敗した、むしろ、官僚制の存在がこれを妨げていることを隠蔽したという点で。

以上は、ドイッチャーが「経済学に弱かった」ことを示唆しているかもしれない。彼は若いとき『資本論』を全巻、それから『剰余価値学説史』を3年ないし4年のうちに5回ないし6回くりかえし読んだ²³⁾と言うが、それが事実だとしても、「自由資本主義の経済的カテゴリーを持たず、それで社会主義・共産主義のカテゴリーも持たなかった」²⁴⁾との、E. H. カーに対して与えられた酷評が一部、ドイッチャーにも

23) ドイッチャー、山西英一・鬼塚豊吉訳『レーニン伝への序章、その他——遺稿集——』岩波書店、昭和47年、328ページ。

24) M. Cox (ed), E. H. Carr, A Critical Appraisal, Palgrave, 2000, p. 157.

はてはまると言ったら余りにも不当であろうか。

【労働者の「革命的伝統」】

トロツキーは革命後の労働者の消耗と疲弊、その「道徳的磨損」を語りつつ、十月への記憶とともにその革命的伝統の存在を最後まで否定しなかった。そうでなければ、ソ連労働者に反官僚革命を呼びかけはしなかったろう。これに対し、ドイッチャーは後者に懐疑的、ほとんど否定的であったが、前者にはこれまた最後まで同意を示していた。この点、トロツキー以上であったと言ってもよい。20回党大会直後に書かれた一文にはこうある。「スターリン主義は教育を広め、国民の知的好奇心を高め、また、歪められた教会式の独断的な変形ではあるが、革命の社会主義的伝統を生かし続けることによって、やがては極めて高い政治意識の発展のもとになるような数々の要素を蓄積してきた」²⁵⁾。もっとも、彼は太急ぎでこう付け加えてはいる。「しかし、スターリン主義はこうした要素が行動的な社会意識や積極的な政治思想となって合体・結集することを極力防いでもきた」²⁶⁾。この認識（多大の保留にもかかわらず、基本的にはその存在を否定しない）はその後一貫している。1960年にはこう言われる。「“労働者国家”にたいする国民の基本的な忠誠心は弱められはしなかった」²⁷⁾。そして最後の著作でも、非スターリン化の不徹底と限界を鋭く指摘しながら、なお次のように述べる。「公式の非スターリン化の背後には、非公式の非スターリン化、根こそぎの、徹底的な変化への、広範にゆきわたっている期待がある。公式の政策と非公式のムードとは、ともに、遙かに大きな自由と合理性と人間性を持った、革命の初期の英雄的時代の、追い払われてしまっていない、もしくは生き生きとした記憶に力づけられている」²⁸⁾。

とは言え、時の経過とともに、革命的伝統が存在するとの主張と、それへの懐疑または保留との関係には微妙な変化が見えるようになるのも事実である。フルシチョフの追放に接したドイッチャーは早速こう論評した。「ソヴィエト労働者階級とインテリゲンチアの展望がいちじるしく変わったにもかかわらず、彼らの新しい文化的能力と、明らかに御しにくい傾向にもかかわらず、彼らは今までは下からのはっきりとし

25)26) 前掲『変貌するソヴェト』14ページ。

27) 前掲『大いなる競争』69ページ。

28) 前掲『ロシア革命五十年』60ページ。

た政治運動とか、官僚体制に対する全国的に広範な反対運動とかは何一つ結成しなかった」²⁹⁾。そして最後の著作でドイッチャーは遂に「ブレーキ・メカニズム」について語りだした。

「社会的統制を代行する官僚的統制は、新しい進歩に対するブレーキとなった。国民は自分自身の富を管理し、自分自身の運命の主人公となることを切望している。しかし、国民は自分の熱望をどう発言していいか、はっきりわからないでいる。何十年かにわたる全体主義的支配と一枚岩的規律は、国民から自己表現、自発的行動、自己組織の能力を奪い去ってしまった」³⁰⁾。こうしてドイッチャーは、読み方次第ではほとんど1991年の予告ともとれる発言を行った！ 曰く「ソヴィエト市民は、今その下で生活している比較的ゆるやかな官僚の後見にも、スターリン独裁のもとではけっして見せたことのない、じりじりとした苛立ちをしばしば見せる……このような不満は進歩の原動力である。だが、それはまたソ連でときどき見られるように挫折の源となり、不毛なシニズムの源にさえなるかもしれない……革命と体制の持続性のかげに隠れて、革命の非合理的な面は合理的な面とともに生き残り、持続する。この二つの面はたがいに引き離すことができるだろうか？ 非合理的なものを克服して、がっしり掴んでいるその手から創造的な力を解放することは、明らかにソ連にとって重大な利益である。現在のような不調和な結びつきは激しい幻滅を生み出す。このため、国民の目には、革命の壮大さも、革命のみじめさに覆い隠されてしまうかもしれない。過去の革命でこのようなことが起こった場合には、結果は王政復古であった」³¹⁾。

☆ ☆ ☆

ドイッチャーはソ連に対する明るい展望を終生示しつつ、その暗い可能性にも目配りを忘れなかった。そのいずれが、そして特に最晩年に彼が与えようとしたもののうち、いずれが彼の本当のメッセージだったろう。それとも彼自身、トロツキーの反官僚革命の綱領に対する判断は「次の世代の歴史家にゆだねたいと思う」³²⁾と書いたよ

29) 前掲『現代の共産主義』165ページ。

30) 前掲『ロシア革命五十年』60ページ。

31) 同上、158, 166ページ。

32) ドイッチャー、山西英一訳『追放された予言者・トロツキー』新潮社、1964年、348ページ。

うに、いずれがそれであるかの判断も次の世代に委ねようとしたのであろうか。